

# FAIRY TAIL After the Final

ヤシユー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、フェアリーテイルの最終話から数ヶ月後の物語。

フェアリーテイルは平穏を取り戻し、いつも通りの日々が流れていた。

そこに、2人の男女が現れる。

龍の心臓と名乗った2人はとある話をギルドに持ち込んだ。

この話は『アリス』を主人公とする物語です。

時間軸としては漫画版フェアリーテイル最終話から数ヶ月していつも通りのフェアリーテイルに戻った後の物語。

・・・ですが一部改変があつたりします。

マカロフ元氣だったり、聖十大魔導が違ったり。

存在しない魔法があったり。

それと、主人公は最強の魔導士という設定なので規格外な強さです。

# 目次

プロローグ	1
歌姫	8

# プロローグ

「マグノリア フェアリーテイル 妖精の尻尾ギルド」

今日も魔導士達がギルドに仕事を求めてやってくる。

街の人や評議員からの仕事をこなし、報酬を得る。

それが魔導士であり、その組合が魔導士ギルドだ。

そして、ここ、妖精の尻尾はフィオーレーのギルドとして有名なギルドである。

数々の仕事が舞い込み、魔導士で溢れるギルドはフィオーレーと呼ばれるに相応しい

様相をしている。

そんなギルドで働く一人の魔導士青いネコと共に今日も仕事を探してクエストボー

ドの前に立っていた。

この男、名をナツ・ドラグニル。

サラマンダー 火竜の呼び名で有名な火の滅竜魔導士だ。ドラゴンスレイヤー

そして、彼と共にいる青いネコはエクシードのハッピー。

ナツの相棒だ。

いつも通りのうるさいギルドでナツは仕事を選び看板娘に渡す。

数少ないS級魔導士の1人、ミラジエーン・ストラウス。

週刊ソーサラーでグラビアもやる人気魔導士だが現在は魔導士としては引退しておりギルドの受付兼看板娘として酒場の切り盛りをしながらクエストの管理を行い、ギルドマスターと共にギルドの運営に携わっている。

「ナツは今日もハッピーと2人？」

「おう！ルーシイはエルザと仕事に行っていていねえからな。」

「だったらグレイと行けば良いのに。」

ふふつと微笑みながらミラが言った。

「あいつはダメだ。足を引つ張られるからな。」

ナツがそう言つて仕事に向かう。

それとほぼ同時に1人の少女がギルドに入ってきた。

その瞬間、静寂が訪れる。

その少女はメンバーの誰も見たことの無い顔で、肌がピリピリとするような魔力を放っていた。

「皆手を出さないで！マスターー！」

ミラが叫ぶと2階から1人の老人が現れた。

彼はマカロフ・ドレアー。

妖精の尻尾ギルドマスターで大陸上位10人の強き魔導士  
聖十大魔導せいじゅうだいまどうの1人である。

「なんじゃあ？お主は。」

マカロフが2階から飛び降りてバーカウンターに立つと少女を睨むように見つめて言った。

「私はアリス・アルヴァスター。龍ドラゴンハートの心臓の魔導士です。」

本日は妖精の尻尾に所属している滅竜魔導士に用があつて来ました。」

少女は淡々と告げるとキョロキョロと辺りを見回してナツを見つけ、ナツの元に歩み寄る。

「俺に何か用か？」

「ええ、貴方にはここで死んで頂きます。」

アリスと名乗った少女はそう言うのと両手を凍らせてその両手でナツを殴る。

「なんだあ？いきなり！」

「私は滅竜魔導士が憎い。」

両親を殺した滅竜魔導士が。

だから、滅竜魔導士を滅ぼす。

私の魔法は滅竜魔導士を倒す為に鍛えた対滅竜魔導士魔法。」





ウエンデイ・マーベル。

天空の滅竜魔導士だ。

「ナツさん！加勢します！」

ウエンデイがナツの元に駆け寄って言った。

アリスはそれを横目にウエンデイの天竜の咆哮を食べた。

「空気を食べた!?!」

「ウエンデイちゃんも食べるだろうが！」

ギルドのメンバーが突っ込む。

ウエンデイも滅竜魔導士。

空気を食べる事が出来る。

「凄いもの、みせてあげますね！てんかりゆう天火龍の咆哮！」

そう言ってアリスは炎と風が合わさった咆哮を放つ。

そして、それと同時にアリスの後ろに男が現れた。

彼はアリスの頭に手を置くとアリスの魔法はかき消された。

「俺は龍の心臓、ギルドマスターのオズ・アルヴァスターです。

うちの妹がお騒がせしました。」

オズはそう言って深々とお辞儀をした。

「兄様！」

「妹は昔から滅竜魔導士を憎んでいました。

妖精の尻尾に滅竜魔導士が所属していると聞いて飛び出してしまつて。

ですが、間に合つて良かった。

お二人ではアリスには勝てませんから。」

「俺が弱いつて言いてえのか？」

ナツがオズを睨んで言った。

「いえ、そう言う訳ではないです。

ただ、お二人と我々では元が違います。

お二人は滅竜魔導士でしょう？」

我々は滅竜魔導士。

同じドラゴンスレイヤーでも我々は龍から生まれ、魔法を教わりました。

我々の両親は特殊でして。

父親は祖龍シエーンレイブーン。

母親は虹竜の滅竜魔導士でした。

人と龍の間に生まれたのが我々です。」

そう言つてオズはコートとYシャツを脱ぐと彼の左胸から左肩にかけて黒い鱗が生

えていた。

同時にアリスが服を脱ぐとアリスの両胸と腕を黒い鱗が覆っていた。

ナツとウエンディはそれに少しだけ見覚えがあった。

ドラゴンフオースと呼ばれる力。

それを発動した時、自身の体にも同じ様に鱗の様な物が表れる。

しかし、それは一時的な物だし、鱗と呼べるかも少し難しい様な物だ。

しかし、2人の物は鱗と呼ぶに相応しく、それは2人が本当に龍と人のハーフであると思わせる。

「アリス、女の子なのだから簡単に服を脱いではいけませんよ。」

「はい、兄様。裸は兄様にしか見せません。」

アリスはそう言って微笑む。

オズは苦笑いしてアリスのネクタイをしめてやるとこほんと咳払いして口を開く。

「我々は話があつて、ここに来ました。」

## 歌姫

オズから発された話はギルドのメンバーを震撼させた。

それは、オズ達の仲間である『歌姫』が失踪したと言う話。

そして、それと同時に2人に降りかかる不可解な事件。

その事件には必ずフェアリーテイルが関係していたと言う事。

そして、敵は共通であると言う事。

オズはそれらの経緯を話し、マカロフに協力を仰いだ。

そして、アリスの頭に手を乗せるとアリスに向けて頷いた。

アリスは微笑むと一歩前に出た。

すると無言で右手に炎を灯した。

「私は虹龍の魔法を使います。」

この魔法は滅龍魔法ですが接収テイクオーバーに近く、滅竜魔法を食べる事でその滅竜魔法を滅龍

魔法に強化して使えます。

また、2つの滅龍魔法を合成する事も可能です。」

そう言って左手に風を纏わせると胸の前で両手を合わせる。

それと同時に右手には炎とその周りを風が吹く。

風に吹かれ炎が揺るぎ、なんとも不思議な光景だ。

「これが虹龍の力の1つ。」

そしてもう1つは・・・」

アリスはそう言いかけてウエンデイに抱き着いた。

「ひゃうっ!？」

ウエンデイから情けない声が出る。

いきなり抱き着かれればそうなるだろう。

アリスはウエンデイに抱き着いたまま、ウエンデイの唇を奪い舌を入れる。

それは、愛らしいキスとは違い、ねっとりとした、大人のキス、所謂ディープキスと言われる物だ。

アリスはウエンデイの唇から自身の唇を離すと唇をペロリと舐めて微笑んだ。

「龍<sup>キフト</sup>転嫁：天火龍。」

アリスが呟いた。

「これがもう1つの力。」

最後に使った合成滅龍魔法を他の滅竜魔導士に転嫁させる事が出来ます。

発動には条件があって1つは舌を絡めたキスでしか移せないと言う事。

もう一つは合成された滅竜魔法でないと移せないと言う事。

そして移す際どちらか片方の属性を扱える滅竜魔導士である事が条件です。

そして、これには大きな弱点があります。」

アリスがそう言つて息を飲む。

「弱点？なんだ？」

ナツが聞いた。

「それは、私は兄様以外の殿方とキスをするつもりはないと言う事です。

兄様以外の殿方とキスをするなんて穢らわしいです。

絶対に、生理的に、無理です。

私の体は、心は、魔法は、愛は兄様に捧げる物。

それを穢らわしい雄猿なんかに触れさせる事も嫌な程です。

兄様以外の殿方なんて消えてしまつても良いくらいですから。」

アリスが微笑んで言つた。

それと同時にその場にいた皆が心に思つた。

『この子はヤベエ。』と。

優れた能力を持つ者が必ずしも優れた人格者では無いと言うが彼女はそれを体現し

た様な者だ。

超ブラコンであり、兄以外の男に興味を示さず、穢らわしく思う。

彼女にとってはそれが普通の事なのだ。

「アリス、あまり話をそらさないでくれ。目的は違うだろう？」

オズがあきれた顔で言った。

「兄様。そうでしたね。」

我々の目的はとある闇ギルドに拉致された私達の仲間である『歌姫』の救出とそのギルドの壊滅。

そのギルドの名は妖精フェアリーコフインの棺桶。

妖精討伐を専門にしたギルドだそうです。

まあ、実績はないらしいですけど。」

アリスが言った。

フェアリーテイルのメンバーは聞いたことのない闇ギルドの名前が出てざわつとした。

「フェアリーコフインはフェアリーテイル討伐の為に結成されたギルドと聞く。」

なんでも滅精フェアリースレイヤ魔導士なる魔導士が所属しているとの話だ。

そして、我らが仲間である『歌姫』を拉致したのは彼女の力が妖精狩りに必要だからだろう。

彼女の實力はかなりの物。

彼女が味方していたら俺達に勝ち目は無いだろう。

今は彼女が俺達の味方である事を信じて本拠地へ乗り込むしかない。」

オズは静かに告げた。

マカロフはぐぬぬと唇を噛み怒りを顔に表す。

「どこの誰だか知らねえが妖精狩りだあ？」

クソ喰らえじゃ。

どちらが狩る側か知らしめてやるわい！

ガキ共！戦争じゃあ!!」

マカロフの一言でギルド内はメンバーの声で溢れる。

たった一言でメンバー全員を鼓舞し、従わせる。

流星は聖十大魔導だとオズも感心してアリスと共にその姿を眺めていた。